

SF的読み解き

子どもという風景

第三十回 「ちよっと」の構造

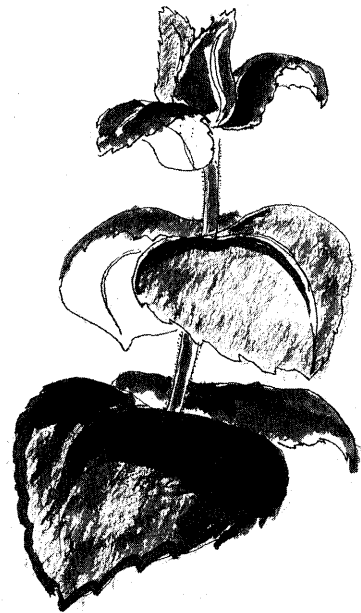
堀内 守

ふしぎな間合い

どこにでもそういう人はいる。ご本人は口ぐせになっ
ているから気がついていない。けれども、まわりの人に
はわかる。

たとえば「ちよっと」という言い方だ。

「ねえ、ちよっと」「ちよっとそこまで」「ちよっとお
待ちください」「ちよっとお目にかかりたいのですが：
…」などには日常の場面でよくお目にかかる。「ちよっ
と」はまことに便利なことばである。



少し変形すると、語り手の人柄や地位や趣味まで表現
できそうだ。

「ねえ、ちよいと」「ちよい待ち」
などが好例である。

もちろん、子どももよく使う。のみならず、その場合
の「ちよっと」ははるかに複雑している。

ちよっとやそっとでは解けそうにもない。そう思われ
るくらい。でも、「まてよ」と考えてみるのもよいだろ
う。ちよいとばかり、ちよっくら、考えてみよう。

芝居にちよつと出る役のことを「ちよい役」などという。ちよつと物悲しく、愛らしく、ちよつと滑稽な表現だが、捨てがたい。だって、「ちよい役」がなければ主役も脇役もありはしないのだから。また、ちよつと救いがあるのは、だれでも「ちよい役」から始まったという事実だ。

「ちよつと」は、「一寸」と書いた。「なるほど」と感心するくらいユーモアのある表現である。(と筆者は信じている。)

「一寸」は、表記としても、尺度としても、表舞台からひっ込んでしまった。出て来て、見栄を切つてもよいと思うが、今日では「一寸」は、「三センチ三ミリ(メートル)」と置き換えられてしまったから、イナセなタンカを切ることはむずかしい。これでは「一寸」のためにちよつと、ときみしい気がする。

——と、いうようなときの「ちよつと」は、ふしぎなこと、ことばどおりの「ちよつと」ではない。まさに、レトリックの妙ともいふべきで、「ちよつと」どころ

か、無念さを秘めた「ちよつと」になっている。

それを見抜くこともできる。見抜けないこともある。

この辺の微妙さは、「ちよつと」ことばで表現することは無理かもしれない。

鳥渡

「一寸」と書いただけではない。「鳥渡」とも書いた。

鳥が渡るというイミやイメージの方も面白いが、これもともと当て字であろう。「ちよつと」である。

ちよつと、違う。それを書き直し、「鳥渡違う」としてみたら、詩的なイメージが喚起されるかもしれない。いや、駄洒落かもしれないから、断定はちよつと控えておく。

要は、「一寸」にひっかかることよりも、「ちよつと」には微妙な表現があって、「あのボールはちよつと打てない」というように、「ちよつと……ない」と続く場合があり、この表現はちよつと、見のがせない、ふしぎな世界へ人を誘うことに注意しておきたい。

ちよっとふしぎなのは、「ちよっと」が呼びかけになるということである。これは、先に挙げた「ちょいと」でも、「ねえ、ちよっと」でも同じである。「もしもし……」というよりも、「すみませんが……」というよりも、若干、少なからず人間くさく、よそ行きの場でもなく、さりとして親し過ぎる場でもなく、ちよっと、微妙な関係にある人同士が使うことばである。

俗語（どうか「ポピュラー」とか、「ポップ」ぐらいに受けとめて下さい）によく出てくる呼びかけがある。また、家の中でも、子どもの遊びの世界でも。あ、忘れてはいけない。叱る場合にも。非難する場合にも。

「ねえ、ちよっと、これ片づけなさい」

「ちよっと、これ、どういうつもり」

「ちよっと貸して」

「ちよっと、どいて」

まったく「鳥渡」のイメージのごとく、つぎつぎと湧いてきます。

この場合の「ちよっと」は、まず音声学上ちよっと見

のがせない。

「ちよっと」「ちょいちょい」「ちよっくら」「ちよくちよく」「ちょこちょこ」のように「ちょ」の音である行為の場を切り拓く。いきなりストレートに言うよりも、「ちよっと」を付すことによって、その場の気配を方向づけてしまう。スローモーション風に表現すれば、「いまから何かを言うぞ」という呼び出しでもあるし、「言うこと」の内容を和らげる効果ももっている。

「ちよっと貸して」の「ちよっと」は、どこまで広がる「ちよっと」なのか、はなはだ微妙である。お金を借りるときなど、大のおとなの人が「ちよっと」を何度も連発し、言いにくそうに言い出す。それは、「ちよっと」ということばで連想されるほど少額ではないし、「ちよっと」ということばで応じうるほど貸し方も金があり余っているわけではない——のを和らげる。

「ちよっと」は気紛れである。

副詞としてはいろいろな場面に顔をのぞかせる。面白いのは文章のなかにはあまり登場しないということだ。

ことに大論文などには登場しない。日常会話、CM、童謡、歌謡が主舞台である。

「ちょっとうれい日曜日」「ちょっとびり悲しい冬休み」「ちょっと不安なお留守番」「ちよいと一杯」。

ちょっと離脱

日常世界のなかからちよつと、離脱するには「ちょっと」の効果は絶大である。

「ちょっと勉強」し、「ちょっと遊び」に出かけ、「ちょっと」と人を待たせ、「ちょっととそこまで」出かけ、「ちょっと」立寄り、「ちょっと」買い物をし、「ちょっと」おしゃべりをし——「ちょっと」は生活世界をちよつとしたドラマに仕立てあげる。

日常生活とてスミからスミまで繰り返しのワンパターンなんてことはないのだ。「ちょっと」の介入によって、ちよつとしたドラマになり、ストーリーをもつようになる。

だから日記や生活記録も存在する。

ちよつとした一工夫で、子どもの作品がちよつとしたものになり、思わぬ世界をかいま見せてくれたりする。

では、ちよいと実験——

白昼夢を見るとか、空想に耽ひるとか、憧憬むねがれるとか、願望をもつとか、もつと現代風にヴィジョンをつくらとか——これらは一般に心を浮遊させることであると見られている。

だが、はたしてそれだけだろうか。

だけれども、「ゲンジツ」の枠をきめることはできない。これは「空想」だ、これは「夢想」だ、これは「憧憬」だ、といって、どんどん削っていけば、その先に何か究極の手ごたえある「ゲンジツ」が待っているか。そう思うことが空想なのである。そんな意味の「ゲンジツ」なんてありはしない。「ゲンジツ」なるものは、人間の「空想」や「夢想」や「憧憬」や「期待」によって織りあげられ、立体的になっているのだ。

教科書に書かれている「ゲンジツ」なるものはあまりにも通俗的で合理的過ぎる。それは、まるで「空想」や

「夢」のことごとくが単なる化粧品のようなもの、余分なものとして見ているようなのだ。

でも、生きたゲンジツを見てみよう。そこではどんな場面にも「夢想」があつたり、「空想」があつたりする。私たちは、ある時にはちょっとした淑女や紳士になつたつもりでいるし、場面によっては然るべき行動の台本に従つて自演している。

子どもにとつては、冒険譚やおとぎ話、アニメのヒーローやヒロインたちと同化することは朝飯前のこと、お茶の子サイサイのことである。そのとき、子どもたちは、あたかもまったく違つた別人になつたかのごとくふるまうのだ。

ちよつと変容

空想は単なる代案的世界への逃避ではない。きまりきつた生活の輪郭をぼかし、きまりきつたやり方のなかに新味をつくり出し、親しい友人のようになる。心のうちなる劇場は、たった一本の棒切れを「刀」にしたり、

「指揮棒」にしたりする。そのたびに、当の子どもは、みずからを「武士」に変容させ、そのようにふるまつてみせたり、「指揮者」になつたつもりで、そのように自演してみせるのである。目には見えないが、趣味もちょっとした聖なる離脱である。庭、遊戯室、地下室や屋根裏といった場所も、日常的な、きまりきつた世界とは別の世界が存在することを知らせてくれる。

運、偶然、運命、リスクなどを含みもつゲームも、ちよつと変容するにはもつてこいの契機をなす。時間つぶし、しごと、帰宅なども、ちよつとした「冒険」の要素を含んでいる。

「ちよつと」変容するために、化粧をし、衣服を変え、スタイルを変え、イメージを変える。そのことは、他者がイマジネーション——イメージをつくり出す想像力——をもっていると予想しないではありえないことである。

要するに、ちよつと変容するには幾通りものやり方があるわけだ。ゲームをする人は、競技場へ行く。休暇を

楽しむ人びとはどこかへ出かける。また、美術館や博物館を渡り歩くのも、変容を求めてのことである。いや、物静かに坐って、頭のなかでいろいろな事象を動かしてみることだって、ちょっとした変容なのである。

こわい「ちょっと」

「ちょっと来なさい」とか、「ちょっと来い」は、同じ「ちょっと」でも、いきなり別世界を呼び出す。叱られるとき。説教されるとき。何か悪い予感がする「ちょっと」である。

隠しておいた悪戯のあとが見つかってしまった。「ちょっと来い」は、そういうときに現われる。やりっ放しのことが見つかり、どうして途中で放り出したのだとキツモンされるのも「ちょっと来なさい」ではじまる。「これは何だ」「どうしてこうなっているのだ」ということばが飛んでくる。

だから、この種の「ちょっと」は実にケンノンである。



反対に、ややていねいに「ちよっと来てよ」は、だいたい何か頼まれるとき。「ちよっとおつかいに行ってきた」とか、「ちよっと手伝ってくれ」と続く。これもあまりふれた「ちよっと」である。

どうしてこんなに「ちよっと」は頻用されるのだろうか。ちよっと変ではないか。

電話が鳴る。「ちよっと出てみて、いま手が離せないから」。こういう場合の「ちよっと」は、のっぴきならぬ状況での身代りのようなものだから、事は単純ではないはずなのだが、それでも「ちよっと」である。

もっとも、会社などでは上司から「ちよっと君」と呼ばれることはやたらに多い。何ということか。この種の「ちよっと」は、本当に「ちよっと」のこともあれば、重大命令を伝えるきっかけであることさえあるという。

「ちよっと」の文脈

さて、こんなに変幻自在な「ちよっと」の風景をこの辺でちよっと整理してみようではないか。すると、意外

なことに、「ちよっと」は、ちよっとやそっとでは整理できないような様相を呈するのだ。

いや、そもそも「ちよっとやそっと」となるに及び、「ちよっと」は、重みを転じ、まことに深刻なイミを発信しはじめた。

この「ちよっとやそっと」は、かならずその先に否定語を伴っていて、その否定を強めるはたらきをもっている。「ちよっとやそっとでは動かない」などのように。

また「一寸見」などの名詞もできている。これで「ちよっとみ」とよませる。ことばどおり、「ちよっと見」ること、「ちよっと見」たところを意味する。

「ちよっと見るだけだよ」「ちよっと見せて」「ちよっと見ただけなのに」というように広がり意外に広大だ。

「ちよっと見たら、もう見えなくなった」「ちよっとしか見られなかった」「ちよっと（ちいと）も見られな

い」。

「ちよいと出ました」「ちよい待ち草のやるせなさ」

「ちょっと知っている」等の微妙なニュアンスは、物語の世界から別世界への誘惑を伴っている。

呼びかけが結構多いのだ。「ちょっと待て」「ちょっと、君」などが典型である。これを応用した番組名もあったっけ。軽みがあり、ユーモアがあり、お人好しであるような主人公。「花子さんちよっと」「お母さん、ちよっと」「中村君、ちよいと」等々。

「ちょっと」が試みに意味する場合がある。物は試しだ、ちよっとやってみようというわけである。「ちよっとやってみる」がその代表である。となると、このちよっとは、子どもの世界ではやたらに多いことも納得されよう。すべてが「ちよっとやってみる」で成り立っているといってもよい。

文字通りなのが「わずか」や「少し」を意味する場合である。それなのに「ちよっと」が「かなり」を意味する場面もあるから事は複雑になってくる。例としては「ちよっとした店だ」とか「ちよっと金がある」などだろう。この「ちよっと」「わずか」「少し」をヒネるま

でに世の中を見てこなくてはならないから、ふつうの子どもには使えない。大変なレトリックを要するからだ。

もう少し、態度決定を伴なう「ちよっと」もある。これも否定の語を伴っていて、「少々のことでは」の意味合いが強い。

「ちよっとできないな」。相当やっても、やりとげる自信がない、というのである。この「ちよっと」と「ちよっとやそっと」とは構造が似ている。いや、ほとんど重なっているといってもよいくらいである。だから、この意味の「ちよっと」を使いこなすには、あるていど時をかけなければならない。

「ちよっと」の音調

意味の文脈から離れよう。そして、「ちよっと」の生きた脈絡をウォッチングしてみるのである。

なるほど驚くべき多様性が見られる。

「ちよっと、早く並びなさい」「もうちよっと左へ寄って」「この計画じゃ、ちよっと無理かもしれない」「じ

や、私がちょっと走っていつてくる」「ねえ、ちょっと見て、この絵、ちょっとしたものじゃない？」「うーん、ちょっとマネできない」「ちよいとしたものね」などという会話は、ちょっととした集まりで平然と交わされている。

「もうちょっと」も結構多い。「もうちょっと頑張れば、ちょっととした成績になれるのだが」「ちょっと心配になってきた」「もうちょっとのしんぼうだよ」「ちょっとちょっとっていうけれど、そのちょっとにはもう聞き飽きた」などと。

「ちょっとだけお時間をいただきたい」なんて電話がかかってきたら、一見ひかえ目な口調のなかに、「ちょっとやそつと」では動かないというくらいにしたたかさなどが加わっていることもあって閉口する。おとなだけではなく、子どもの世界でもこういう「ちょっと」は日常的に見られ、「ちょっと」はどこへやら、延々と続くことになりがちである。

つまり、この「ちょっと」は、当面の手がかりをうる

ための「ちょっと」だから、語調はていねいだし、ひかえ目であるし、恐れ入っているような響きもある。

利害を超えた「ちょっと」はなかなかいいものである。

「ちょっと失礼」というときの「ちょっと」は本当に微妙である。「ちょっとごめんなさい」なども、本当に「ちょっと」したことのようにでいて、それがあるから仰々しさが弱まっていく。何なら、他人の前を「失礼」と言って通るときと、「ちょっと失礼」と言って通るとき、自分の身体の緊張度を想像してごらんになるとよろしい。「ちょっと」が入っただけで、身の動きはぐっと変わるはずである。そして気が楽になる。

こんなことはあたりまえだから、というので、「ちょっと」が切り拓く世界はあっさり忘れられているのがふつうであろう。だが子どもの行動に視線を合わせて見ていると、「ちょっと」は、余分な作法を超えて、みごとにやりとりを始動させているのが見えてくる。

「ちょっと」は、そこにおいては調子がよいときはぐ

んぐん伸びたり、ぐんぐん広がったりする。のみならず、ひとつの「ちよっと」が別の「ちよっと」を呼び出して、絡み合い、増幅し合い、溢れ出す力となることもある。「ちよっと」がちよっとのうちは無我夢中の世界に転じてしまい、きっかけが「ちよっと」にすぎなかつたなどということは忘れ去られてしまうからである。

以上のことは、ちよっと、見のがせないことではなからうか。ちよっとやそっとではできあがってはこないことというべきではないだろうか。「ちよっと」ならぬ「そっと」のぞいて見る価値があるように思える。

おとなだつて似たようなもので、「ちよっとお茶でも」というきっかけから延々と談話を楽しむことだつてよくあるし、「ちよっとごあいさつを」が重々しい作法に通じたりしていて驚かされることだつてあるはずだ。

こんな大変なことを短時間で片づけてくれたのに、その人は「いや、ちよっと」と軽く応ずるだけなどということもある。「いやあ、ちよっととした失敗をしましてね」が、かなりのことであつたりしたり。

ちよっとから入って、あちこちめぐつてくると、ちよっとの世界はちよっととしたもので、ちよっとやそっとではつかみ切れぬ世界であるらしいが、ちよっと探険してみたくなる。

(名古屋大学)